

おくのほそ道の風景地 象潟及び汐越

- 1 所在地 にかほ市象潟町字象潟島2 ほか
- 2 所有者 にかほ市 ほか
- 3 面積 35,868.65㎡
- 4 指定基準 名勝の部 八
- 5 説明

日本の代表的な俳諧師である松尾芭蕉(1644～1694)は、往昔の歌人であった能因・西行などの古歌にまつわる地を訪ねて陸奥・北陸路を旅し、自らの俳句のみならず、同道した弟子の河合曾良の俳句をも織り交ぜ、紀行文学としての『おくのほそ道』を完成させた。芭蕉と曾良が訪ね、『おくのほそ道』又は『曾良旅日記』に書き留めた場所、及び2人が俳句を残した名所及び由緒・来歴の地の多くは、その後、広く観賞の対象として知られるようになり、往時を偲ばせる優れた風景を今に伝える。

今回は『おくのほそ道』にゆかりのある土地のうち、「草加松原」、「ガンマンガ淵(慈雲寺境内)」、「八幡宮(那須神社境内)」、「殺生石」、「黒塚の岩屋」、「武隈の松」、「金鶏山」、「高館」、「象潟及び汐越」、「親しらず」、「有磯海(女岩)」、「那谷寺境内(奇石)」、「大垣船町川湊」の13箇所を「おくのほそ道の風景地」として指定し、保護を図るものである。

象潟は松島と並んで、芭蕉の旅の目的地となった所である。芭蕉は、象潟を訪ねることができた深い感動を「江山水陸の風光数を尽して、今象潟に方寸を責」と書きとどめている。汐越に近い象潟橋のたもとから舟にて能因島へと渡り、能因法師に因む「三年幽居の跡をとぶらひ」、干満珠寺の境内に舟を寄せて西行の古歌の名所を訪ねた。また、境内から望む象潟の風景を松島のそれと比較して、「倂松島にかよひて、又異なり。松島は笑ふが如く、象潟はうらむがごとし。寂しさに悲しみをくはえて、地勢魂をなやますに似たり」と記した。遙かな水面と雨に煙る島々の愁いある風情を、悩める美女西施の如く咲く合歡の花に交えて、芭蕉は「象潟や雨に西施がねぶの花」と詠み、島の岩上に営まれた雉鳩の巣を見て、曾良は「波こえぬ契ありてやみさごの巣」と詠んだ。

象潟は芭蕉が訪れた後に文化元年(1804)の地震によって隆起し、干上がった潟湖は農地と化した。今もなお田植えの季節には芭蕉が訪れた頃と同じように島々が水面に浮かぶ風景が現れる。たまたま出会った祭礼に因んで曾良が「象潟や料理何くふ神祭」と詠んだ熊野神社の境内をはじめ、舟の発着場所であった象潟川、現在の甘満寺境内の一部を成す八つ島、寺の参道とその周辺の上堂の森・下堂の森・弁天島・鮎桶島・鮎蓋島・みさご島から成る一帯の風景は、芭蕉と曾良が訪れた頃の象潟を彷彿とさせる。



能因島



みさご島



蚶満寺山門と旧参道